

個体概念説による固有名の意味論

三木那由他*

1. 序論

固有名はどのような意味を持つのか。この問題は、言語哲学という分野において繰り返し論じられてきた。本稿では、固有名の意味に関する新たな立場を提案する。

言語哲学上の問題は、言語現象に即して分析されるべきであろう。そこで本稿では、まず固有名に関わる代表的な言語現象を紹介する(2)。そして過去の伝統的な諸理論が各現象をどれだけ説明でき、どれだけ説明できないかを解説する(3)。次いで、そうした諸理論よりも説明力に優れていると思われる新たな説の概要を述べる(4)。この説を本稿では、「個体概念説」と呼ぶ。

ここで紹介する理論の基本的な発想は、Kamp & Reyle (1993) の談話表示理論 (DRT) に近いものである。両者の重要な類似点は、世界の事物や事態だけで表現の意味を特定するのではなく、事物でもなければ表現そのものでもない、何かしら中間的なレベルを認め、そうしたレベルからの意味上の寄与を許すというところだ⁽¹⁾。後に述べるように、私の分析では各固有名はそうした中間的なレベルにおけるそれぞれ別の対象を指示している。そしてそうした対象は、それぞれ別であるにも関わらず、ときに同じ個体に結び付いているのである。

2. 固有名をめぐる諸現象

この節では、固有名に関する諸現象を紹介する。ときにいくつかの説への言及があるが、いずれも詳しくは次節で述べる。

存在言明の否定

(1) Pegasus doesn't exist.

重要なのは、この文が真なる命題を表現しているように思えるということだ。指示対象を持たない名前については、(1) のような存在否定言明が真となりうる。これは固有名の意味論が扱うべき現象のひとつである。こうした名前は「空名 (empty name)」と呼ばれる

空名を含む肯定文

(2) Pegasus flies.

「Pegasus」は空名であるから、(2) は実在しない対象に関する言明であるように見える。にもかかわらず、この言明は何らかの点で真であるように思われる。つまり、

空名でも、動詞句と結びつき真なる命題を表現する文を形成しうるのである。

フレーゲのパズル

(3) a. Mark Twain is Samuel Clemens.

b. Mark Twain is Mark Twain.

(a) は実質的な情報を持つ言明をなしているように思える。対して、(a) に現れる名前「Samuel Clemens」を同じ指示対象を持つ名前「Mark Twain」で置き換えた結果である (b) は、実質的な情報を持たないトリビアルな真理を表現しているように見える。この現象はフレーゲによって発見され、フレーゲのパズルと呼ばれる (Frege, 1892/2008)。

内包文脈中の振る舞い

(4) a. John believes that Mark Twain was American.

b. John believes that Samuel Clemens was American.

こうした言明が同じ一人のジョンについてなされている場合にも、一方が真でありかつ他方が偽であることはありうる。例えばジョンはトウエインの著作に親しんでおり、彼がアメリカの作家であると信じているとしよう。さらにジョンはトウエインとクレメンスが同一人物だとは知らず、なおかつ「Clemens」という名字の人間はアメリカにはおらず、イギリスにのみいると信じ込んでいるとしよう。このとき、(a) は真だが (b) は偽となろう。つまり、内包文脈中では、同じ指示対象を持つ名前の置き換えが、文全体の真偽を変えてしまうことがありうるのだ。

様相文脈中の振る舞い

(5) a. Aristotle might not have been the teacher of Alexander.

b. The teacher of Alexander might not have been the teacher of Alexander.

(a) が真であるように見えるのに対し、(b) は偽であるように思える。この現象は記述説への反例として、クリプキにより報告された (Kripke, 1972)。クリプキはこの文脈で、固有名はすべての可能世界で同一の対象を指示する固定指示子 (rigid designator) であり、確定記述句⁽²⁾ はそうではないと述べている。

固有名への決定詞の付加

(6) a. There are relatively few Alfreds in Princeton.

b. An Alfred joined the club.

固有名は、ときに決定詞を伴って普通名詞と同じように用いられる。この現象はバージによって報告された (Burge, 1973)。バージはこの現象が、メタ言語記述説をサポートするものと主張した。

以上が、本稿で取り上げる現象である。次節では、従来の代表的な理論をこれらの諸現象との関連を見つつ、紹介する。

3. 指示説と記述説

3.1 指示説

指示説は、固有名の意味はその指示対象に尽きるという立場である。古典的な指示説はミルによって提案された。その後 3.1 節で述べる問題のゆえに擁護者が減ったものの、クリプキによる記述説への反論 (3.2.1) をきっかけに勢力を盛り返し、現在ではソームズなどが支持している (Mill, 1843/1973; Kripke, 1972; Soames, 2010)。

3.1.1 古典的指示説

古典的指示説では、固有名の意味はその指示対象に尽きると主張し、それ以上の主張はなされない。この立場の強みは、少なくとも私たちの素朴な直感には合致しているということである。

さて、この立場はどの程度の説明力を持つのだろうか。まず上で挙げた現象のうち、様相文脈中の振る舞いについてはうまく扱えるだろう。様相文脈中の振る舞いについては、固有名の意味が指示対象に尽きるのに対し、確定記述はそうではないと考えたなら、問題なく扱える。

だがこの立場の問題は、空名を含む事例、フレーゲのパズル、内包文脈中の振る舞いに関して、誤った予測をすることである。

まず存在否定言明「Pegasus doesn't exist」を取り上げよう。「Pegasus」は空名であるから、指示対象を持たない。その場合、指示説において「Pegasus」は意味を欠くことになるため、文「Pegasus doesn't exist」全体は十全な命題を表現せず、問題の言明は真理値を持たないか、もしくは偽となってしまう。また仮に「Pegasus」は空名ではなく、実は何らかの指示対象を持つとしたなら、結果的にペガサスは存在することになってしまうため、言明「Pegasus doesn't exist」は偽になるように思える。いずれにせよ、この言明が真であるという直感を説明することはできない。

似たことが、空名を含む肯定文についても言える。指示説において「Pegasus flies」が真となるには、「Pegasus」の指示対象がなくてはならないが、そうしたものは存在しない。ゆえに「Pegasus flies」の真理を説明することはできない。

フレーゲのパズルや内包文脈に関する問題も同様に生じる。固有名の意味が指示対象に尽きる以上、「Mark Twain is Samuel Clemens」という文が表現するのはトウェインそのひとがそれ自身と同一であるという同一性言明にならざるを得ない。これは「Mark Twain is Mark Twain」が表現する内容とまったく同じ、トリビアルな真理であ

る。内包文脈に関しても、合成原理⁽³⁾に従う限り、一方が真で他方が偽であることを古典的指示説は説明できない。なぜなら「Mark Twain」と「Samuel Clemens」はまったく同じ意味を持つからである。

3.1.2 ソームズの応答

ソームズは、いくつかの現象を意味論に無関係なものとする事で、問題を解消しようとした (Soames, 2010, chap. 7)。ソームズによれば、フレーゲのパズルのような、同じ指示対象を持つ名前に関する問題は、単に語用論的なことにすぎず、意味論が説明することではない⁽⁴⁾。フレーゲのパズルの二つの文が違う内容を持つように思われるのは、違う名前が現れることによってその発話において違う内容が語用論的に伝達されるからであり、それ以上のことではないと、ソームズは考えるのだ。

内包文脈に関しても同様に処理される。ソームズによれば、「John believes that Mark Twain was American」と「John believes that Samuel Clemens was American」は厳密にはいずれも真となる。ジョンはトウェインでもありクレメンズでもある個人がアメリカ人だと、確かに信じているからだ。しかしこうした信念報告文の発話者が「Mark Twain」を用いるか「Samuel Clemens」を用いるかに応じて、実際の発話がもたらす内容は変化する。それにより、「John believes that Mark Twain was American」は正しく、「John believes that Samuel Clemens was American」は誤っているという直感がもたらされるのである。だがソームズの考えでは、これはあくまで語用論的現象に過ぎない。

こうしたソームズの議論は、確かに指示説に向けられる批判の一部を無力化するかもしれない。だがソームズのサポートは、少なくとも直接的に空名の問題に適用できるわけではない。結局のところ、「Pegasus doesn't exist」や「Pegasus flies」のような文がときに真なる内容を持つという現象は、指示説にとって最大の躓きの石であるように思われる。

3.1.3 指示説についてのまとめ

指示説は直感的に受け入れやすく、しかも最近ではソームズによる補強などもあったものの、空名を含む事例の扱いが困難であるという問題を抱えている。従って指示説は固有名の意味に関する決定的な説とはならないだろう。

3.2 記述説

記述説は、固有名の意味は何らかの確定記述の意味と同じであると考え⁽⁵⁾。古典的にはラッセルによって提唱され、その後サールによる改定がなされた (Russell, 1918/1956; Searle, 1958)。他方で、バージ、バックらはメタ言語記述説という、ラッセ

ルらとは一線を画す記述説を提唱した (Burge, 1973; Bach, 1981)。クリプキの批判のの中には、固定指示子化された確定記述を用いる記述説も現れた。ここでは、クリプキの批判以前から見られた種類の記述説を「古典的記述説」としてまとめることにする。

3.2.1 古典的記述説

もっとも古典的な記述説は、有名行為記述説 (famous deeds descriptivism) と呼ばれる。この立場はしばしば記述説の最初の提唱者であるラッセルに帰せられる。これによれば、各固有名はそれにしばしば結び付けられる行為に関わる確定記述句と同じ意味を持つ。例えば「Aristotle」の意味は、「the teacher of Alexander」と同じであるなどとなる。

この有名行為記述説には、名前に結び付けられる確定記述句の選択が恣意的であるなどの明らかな問題がある。サールはこの問題を生じさせないクラスター記述説 (cluster descriptivism) を提唱していると言われる (Searle, 1958) ⁽⁶⁾。それによれば、例えば「Aristotle」は「teacher of Alexander or most famous pupil of Plato or」といった述語の選言を使った確定記述句と同義であるとされる。

また、メタ言語記述説では、固有名 N の意味論的内容は確定記述句「the bearer of N」と同じであるなどというふうに考えられる (Burge, 1973) ⁽⁷⁾。

古典的な記述説すべてに共通する利点は、存在否定言明やフレーゲのパズル、内包文脈での振る舞いをうまく説明できるという点である。例えば「Pegasus」が「the flying horse」と同じであるとしよう。すると存在否定言明「Pegasus doesn't exist」は「the flying horse doesn't exist」と同義になる。さらにラッセルに従って確定記述句が偽装された量化文だとすると、後者はおおよそ「 $\neg \exists x(\text{horse}(x) \wedge \text{flying}(x) \wedge \forall y((\text{horse}(y) \wedge \text{flying}(y)) \rightarrow y = x))$ 」と同義であると予測される。これは真なので、もとの存在否定言明が真であることも説明できる (ただし、このやり方で「Pegasus flies」の真理が説明できるかは定かでない)。またフレーゲのパズルや内包文脈での振る舞いについては、二つの固有名が同じ指示対象を持ちつつ、異なる確定記述句と結びつくことがありうること、で、難なく解決できる。さらにメタ言語記述説では、「An Alfred」は「a bearer of 'Alfred'」、「two Alfreds」は「two bearers of 'Alfred'」などとなるようにすることで、固有名が普通名詞的に振る舞う事例も説明できる。

古典的記述説にとって最大の障壁は、クリプキの反例である⁽⁸⁾。先に見たように、「Aristotle might not have been the teacher of Alexander」は真であるのに、「The teacher of Alexander might not have been the teacher of Alexander」は偽であるように思える。このことは任意の名前や記述に対して拡張できる。任意の名前「N」を考えよう。この名

前の意味が確定記述句「the D」と同じであるとしよう。クリプキによれば、「N might not have been the D」は真であるのに対し、「The D might not have been the D」はそうではない。記述説は一般に、これを説明できない。なぜなら、記述説は固有名が何らかの確定記述句と同義であると主張しているからである。固有名Nがある記述句「the D」と同義であるなら、「N might not have been the D」と「The D might not have been the D」は同値でなければならなくなってしまうのだ。

バックはこうしたクリプキの反例がそもそも成り立たないと論じることで、メタ言語記述説を擁護しようとしている (Bach, 1981)。バックによれば、「Aristotle might not have been the bearer of ‘Aristotle’」が偽になる読みも、「The bearer of ‘Aristotle’ might not have been the bearer of ‘Aristotle’」が真になる読みもあるという。バックの反論の要点は、固有名が様相演算子のスコープ外にあり、記述句がスコープ内にある読み方しかクリプキは想定していないが、実はそうでない読みもあるのだというものだ。だが仮にバックが正しいとしても、クリプキの例が広く受け入れられた背景には、固有名は様相演算子より広いスコープを取ると解釈しやすく、記述句はそうではないという事実があるはずだ。だとすると、やはり固有名と記述句は振る舞いを異にすることになる。これを否定ないし解消しない限り、バックの反論は決定的ではない⁽⁹⁾。

3.2.2 固定指示子記述説

クリプキの反論は、固有名は固定指示子だが記述句はそうではないというものだった。だとすれば、記述句を固定指示子化することができれば反論は成り立たなくなる。こうした発想のもとで記述説を擁護しようとする論者もいる。

そうした論者のひとりであるレカナティは、カプランの「dthat」を使って、確定記述句を固定指示子化することを提案している (Recanati, 2000)。カプランの二次元意味論では、表現の外延は発話文脈と可能世界に相対的に定まる。「dthat」は記述句と結びつき、発話文脈において記述を満たす個体をすべての可能世界で指示するようにする演算子である (Kaplan, 1989)。例えば「dthat (the individual called ‘Alice’)」は、発話文脈において「アリス」と呼ばれる唯一の個体を取り上げ、あらゆる可能世界でその個体を指示する。つまりこの「dthat」が付加された記述句は、すべての世界で同じ対象を指示する固定指示子となっている。これを名前と同義なものを見なすなら、もはやクリプキの反論は成り立たない。

だが、こうした見解は、そのままでは指示説と同じ問題を持つことになる。つまり、フレーゲのパズルや内包文脈中での名前の振る舞いといった問題を解決できなくなるのだ。「Phosphorus is Hesperus」を考えてみよう。いまこれは一つの文の発話なのだから

ら、「Phosphorus」と「Hesperus」が評価される発話文脈は同じである。そしてそれらはいずれもこの文脈で金星を固定的に指示する。これは、結局のところ「Phosphorus」と「Hesperus」がまったく同じ内容を持つことを含意し、「Phosphorus is Hesperus」がトリビアルでないという直感の説明には役立たない。同様に空名についても、指示説とまったく同じ問題に直面するだろう。固定指示子化を用いた記述説は、少なくとも素朴な形では有望でないように思われる。

3.2.3 記述説のまとめ

古典的な記述説は、存在否定言明、フレーゲのパズル、内包文脈中での名前の振る舞いなど、指示説では説明が困難だった現象に一定の説明を与えていた。だが様相文脈中での名前の振る舞いはうまく説明できなかった。対して、記述の固定指示子化を用いて様相文脈中での名前の振る舞いを説明するような記述説は、古典的記述説で解決していた問題が解決できなくなってしまうていた。

3.3 この節の結論

既存の代表的な理論である、指示説と記述説を見た。これらの理論は十分ではなく、それどころか私たちは一種の袋小路に差し掛かっているように見える。指示説を取ると、ある現象が説明できない。記述説を取るとそれは説明できるが、指示説で説明できていた現象が説明できなくなる。この問題を解決しようと改良した記述説は、指示説と同じ難局へと舞い戻っているように見える。この状況は、指示説でも記述説でもない名前の理論を求める十分な根拠となろう。

4. 個体概念説

この節では、指示説とも記述説とも異なる立場として、個体概念説を表明する。この立場では、表現そのものでも世界の存在者でもない、中間レベルの意味というアイデアを採用する。そしてその中間レベルには、個体概念という対象が含まれると考え(10)。個体概念説では、各固有名はそれぞれ異なる個体概念を意味として持つと考える。またこの説では、アンカーに相対的な真理という概念を導入する。これにより、空名を含む肯定文の真理に関する問題が処理できる。

本節では、このアイデアを解説する。あくまで非形式的な素描にとどまるが、およそそのラインは十分に提示できるだろう。

4.1 基本的なフレームワーク

個体概念説では直接的に表現に存在物を割り当てのではなく、中間的なレベルを用いる。つまり、各表現には中間レベルの何らかの内容がまず与えられる（表現を取っ

て中間レベルの内容を与える関数を「解釈」と呼ぼう)。さらに、中間レベルの内容を引数とするようないくつかの部分関数を考える（「アンカー」と呼ぶ）。中間レベルの内容に対して世界の個体（および個体からなる集合論的対象）などを割り当てるアンカーを「外的アンカー」としよう。アンカーはこれ以外にもあってよい。そうしたものの一つを、「性質アンカー」と呼ぶ。性質アンカーは、表現に性質（および性質からなる集合論的対象）を割り当てる関数である。以上のことは、次のような図式で表すことができる。



真理値についても、こうした図式に従って考える。文の真理値は、それが表す中間レベルの内容の真理値と一致する。文が表す中間レベルの内容を「媒介文」と呼ぶことにする。媒介文の真理値はアンカーに相対的に決定されるようにする。

以上のアイデアを、次節からより具体的に論じていく。4.2 節では解釈について、4.3 節ではアンカー、およびアンカーに相対的な真理について述べる。4.4 節では実際の言語現象を扱う。

4.2 解釈

中間レベルの内容は、 n 項関数 P_n と n 個の個体概念 $c_1, c_2, \dots, c_n$ を用いて記述される。解釈関数 f は次のように定義される⁽¹¹⁾。

- (7) α が固有名なら、 $f(\alpha)$ はある個体概念である。（ただし α と β が固有名で、かつ α と β が異なるなら、 $f(\alpha) \neq f(\beta)$ である）
- (8) γ が自動詞なら、 $f(\gamma)$ はある一項述語である。
- (9) γ が他動詞なら、 $f(\gamma)$ はある二項述語である。
- (10) α が固有名で γ が自動詞なら、 $f(\alpha\gamma) = f(\gamma)(f(\alpha))$ である。
- (11) α と β が固有名で γ が他動詞なら、 $f(\alpha\gamma\beta) = f(\gamma)(f(\alpha), f(\beta))$ である。

最後の二つの規則によって文に与えられる中間レベルの内容が、この説での媒介文である。

4.3 アンカー

外的アンカー g_e は中間レベル内容に個体の集合 A から構成される対象を次のように割り当てる。

- (12) 個体概念 c について、 $g_e(c)$ は何らかの個体である。

(13) n 項述語 P_n について、 $g_e(P_n)$ は個体の n 組の集合である。

性質アンカー g_p に関しては、二つ以上の引数を持つ述語の扱いは複雑になるため、本稿では置いておく。さしあたり個体概念と一項述語についてのみ考える。 g_p は各中間レベル内容に対し、性質の集合 Φ の成員、ないし部分集合を次のように割り当てる。

(14) P が一項述語のとき、 $g_p(P)$ は Φ のある成員である。

(15) c が個体概念のとき、 $g_p(c)$ は Φ のある部分集合である。

これらのアンカーに相対的に、媒介文の真理が定義される。

(16) 媒介文 $P_n(c_1, \dots, c_n)$ が外的アンカーに相対的に真 iff $\langle g_e(c_1), \dots, g_e(c_n) \rangle \in g_e(P_n)$
(ただし、 P_n は n 項述語、 $c_1, \dots, c_n$ は個体概念である)

(17) 媒介文 $P(c)$ が性質アンカーに相対的に真 iff $g_p(P) \in g_p(c)$
(ただし P は一項述語、 c は個体概念である)

さらに各文のアンカー相対的な真理値は、それが表現する媒介文のアンカー相対的な真理値と一致するとする。

以上が、個体概念説の基本的な考え方だ。次節で、これがどのようにこれまで見てきた現象を扱うかを見る。

4.4 現象でのテスト

4.4.1 存在否定言明

「Pegasus」の解釈が個体概念 c_p だとし、「exist」の解釈が一項述語 E だとする。上では否定の扱いを述べていないが、さしあたり「Pegasus doesn't exist」全体の解釈が $\neg E(c_p)$ と表せるとしよう。この媒介文のアンカーに相対的な真理を、一般的な否定演算子の扱いを前提して次のように定義しよう。

$\neg E(c_p)$ が外的アンカーに相対的に真 iff $g_e(c_p) \notin g_e(E)$

いま、外的アンカーは空名が表す個体概念に対し、何も割り当てないとしよう。さらに E への外的アンカーによる割り当ては A であるとしよう。すると、問題の媒介文は真となり、直感にかなった説明が得られる。

4.4.2 空名を含む肯定文

「Pegasus flies」が真であるという現象はいかに説明されるだろうか。それを論じる前に、この言明が偽であるという直感もまたあるということを確認したい。例えば、「ペガサスは飛ぶんだよ」という人物に対し、「そんなことはない、ペガサスなんていないのだから」と返すことで先の発言を否定するということはある。つまりある観点からは、「ペガサスなどいないのだから、ペガサスが飛ぶなんてことは誤ってい

る」という直感も得られるのである。

個体概念説では、アンカーに相対的な真理によって、両方の直感を説明できる。まず、外的アンカーに相対的には、先の説と同じようにして「Pegasus flies」は偽となる。対して性質アンカーに相対的には、「Pegasus」の解釈 c_p に性質の集合 {flying, horse, ...} が割り当てられ、「flies」の解釈 F に性質 **flying** が割り当てられるとすると、文全体が真となる。

4.4.3 フレーゲのパズル、内包文脈

個体概念説では、異なる固有名には異なる個体概念が割り当てられる。ゆえに「Mark Twain is Mark Twain」と「Mark Twain is Samuel Clemens」は異なる媒介文を表現する。またその外的アンカーに相対的な真理条件も、前者が $g_e(c_t(\text{twain})) = g_e(c_t(\text{twain}))$ で表しうのようなトリビアルな真理であるのに対し、後者は $g_e(c_t(\text{twain})) = g_e(c_t(\text{clemens}))$ で表しうのような g_e の決め方に相対的なものとなる。

内包文脈については、態度動詞の解釈をどうするかなどの問題がある。だが基本的には同じラインに沿って説明できるのではないと思われる。

4.4.4 様相文脈

現状の道具立てで、様相文脈中の振る舞いを説明することはもちろんできない。ここでは基本的な方針のみを述べるにとどめる。

解釈関数 f はいかなる世界においても各表現に同じ内容を割り当てるとしよう。それに対し、外的アンカーは同じ中間レベル内容に対し、世界ごとに異なる対象を割り当てうとする。ただし、その個体概念に対し外的アンカー g_e がすべての世界で同一の個体を割り当てると想定する。すると、固有名を固定指示子だとすることができる。この考えをうまく実装できたなら、様相文脈に関する問題は生じない。そしてこの解決は、フレーゲのパズルや存在否定言明などに対する上の説明には影響しない。このラインに沿って固有名の意味論が作れたなら、個体概念説は指示説や記述説よりも強い説明力を持つこととなるだろう。

4.4.5 普通名詞的振る舞い

例えば普通名詞的な「Alfred」と通常の固有名「Alfred」に共通の説明を与えるということは、個体概念説にはできない。だが、まずこれらの表現に共通の説明を与える必要があるのかということを疑う必要がある。

バージは、普通名詞的な「Alfred」と固有名「Alfred」が同じ表現であるという前提を取った。そのうえで、決定詞を持たないように見える固有名「Alfred」は実は隠れた決定詞が付いた「(the) Alfred」のような表現なのだとしななければならないと考えて

いる⁽¹²⁾。しかしそうしたメタ言語記述説には、上で述べたようなクリプキの反例が生じる。この状況は、普通名詞的な「Alfred」と固有名「Alfred」が同じ表現であるとするバージの前提が誤っている可能性を示唆するのではないだろうか。

もし普通名詞的な「Alfred」と固有名「Alfred」が異なる表現であるなら、前者を他の普通名詞と同列に扱うことで、問題なくこの現象を処理することができるだろう。

4.5 この説の結論

内包文脈や様相文脈に関しては、さらに厳密に意味論を考えなければ不明確な点も多く残るだろう。だがしかし、本稿で扱ってきた現象の多くを個体概念説がうまく処理することができ、また残されている内包文脈や様相文脈にまつわる現象についても、うまく扱える公算があることは示せただろう。

5. 結論

本稿では、固有名の意味の問題を扱った。指示説や記述説といった既存の代表的な理論は、固有名にまつわる幅広い現象を十分に扱いきれていなかった。それに対し、個体概念説はより多くの現象をうまく説明する可能性を持っていた。

最後に、個体概念説に関してある疑問がありうるだろう。個体概念なるものの、存在論的、認識論的素性の問題だ。この点について、本稿でははっきりとした説明はできない。ただひとつ言えるのは、個体概念は個人的なものではなく、会話の参加者の誰にとってもアクセス可能なものでなければならないということだ。言語表現の意味として個体概念を用いている以上、これは個体概念に関する必須の要件である。いずれにせよ、個体概念の素性については今後の課題となるだろう。

註

* nyt.miki@gmail.com

(1) 三木 (2009) ではそうした中間的なレベルを「意味表示」と呼び、意味表示からの意味的寄与を認めない真理条件的意味論が不十分であることを論じている。

(2) 「the N」という形を持つ名詞句のこと（ただし「N」は普通名詞）。

(3) 表現の意味は、それに含まれる下位表現の意味と、下位表現の統語論的な並びから決定されるという原理。

(4) ここで「語用論的」と呼んでいるのは、言語表現自体が持つ内容ではなく、特定の場面で特定の仕方で表現が用いられたときに生じる文脈的な内容に関わる事柄のことである。

(5) 固有名の指示対象の決定に確定記述で表されるような情報が用いられるという立場と混同しないように注意してほしい。指示対象の決定に確定記述が関与するという説と、固有名は何かの確定記述と同義であるという説は論理的に異なる。

(6) 実は Searle (1958) では、固有名が何かの確定記述と同義であるとは主張されていない。彼の主張は固有名の指示対象は記述を通して決定されるということと、そうした記述を満たす

対象の存在を固有名の使用は前提するということである。サールは自身の立場を記述説の一種と見なすが、それが本当に固有名の意味に関する記述説なのかについては疑問の余地がある。

(7) 実際にはメタ言語記述説にもいくつかの変種がある。

(8) 本稿で扱うのは、いわゆるクリプキの様相論証である。Kripke (1972) には、他にも意味論論証と呼ばれる反論や、認識論証と呼ばれる反論が収められている。

(9) メタ言語記述説にはこの他にも、そもそも根本的な問題があると言われる。ブラウンが指摘するように、メタ言語記述説には異なる言語の使用者についての発話がうまく説明できない場合があるのだ (Braun, 2006)。

(10) カンプとライルの見解では、各固有名は談話指示子とそれに關する一定の条件を意味として持つと考える (Kamp & Reyle, 1993)。例えば固有名「Aristotle」は談話表示構造という中間レベルにおいて、「Aristotle(x)」といった情報をもたらす。これは実質的にメタ言語記述説を受け入れている立場であり、本稿の考えとは異なる。

(11) もちろん、この説明は動詞の扱いに関して単純に過ぎる。だが本稿では固有名の意味論に焦点を絞り、その点は問わないことにする。

(12) 実際のバージの表現から離れて再構成している。

文献

- Bach, K. (1981). 'What's in a Name,' *Australasian Journal of Philosophy*, 59, 4, 371-386.
- Braun, D. (2006). 'Names and Natural Kind Terms,' in Lepore, E. & Smith, B. C. eds. *The Oxford Handbook of Philosophy of Language*, Oxford: Clarendon Press, 490-515.
- Burge, T. (1973). 'Reference and Proper Names,' *Journal of Philosophy*, 70, 14, 425-439.
- Frege, G. (1892/2008). 'On Sense and Nominatum,' in Martinich, A. P. ed. *The Philosophy of Language (5th eds)*, Oxford: Oxford University Press, 217-229.
- Kamp, H. & Reyle, U. (1993). *From Discourse to Logic*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Kaplan, D. (1989). 'Demonstratives,' in Almon, J., Perry, J., & Wettstein, H. eds. *Themes from Kaplan*, Oxford: Oxford University Press, 481-614.
- Kripke, S. A. (1972). *Naming and Necessity*, Oxford: Blackwell Publishing.
- Mill, J. S. (1843/1973). *A System of Logic*, London: Longmans.
- Recanati, F. (2000). *Oratio Obliqua, Oratio Recta: an Essay on Metarepresentation*, Cambridge: MIT Press.
- Russell, B. (1918/1956). 'The Philosophy of Logical Atomism,' in Marsh, R. C. ed. *Logic and Knowledge*, London: Allen and Unwin, 175-283.
- Searle, J. (1958). 'Proper Names,' *Mind*, 67, 166-173.
- Soames, S. (2010). *Philosophy of Language*, Princeton: Princeton University Press.
- 三木那由他 (2009). 「談話表示理論の展開」, 『哲学論叢』, 第 36 卷, 104-15 頁.

〔京都大学大学院博士課程・哲学／日本学術振興会特別研究員〕